鞄　竹の心象

朽身揺歯（くちみゆるは）

01　鞄

若かりし頃、まだ、高校生一年生だった頃に書いたお話です、はぁぁ、純真でしたなぁ・・・（遠い空を見上げる）。
私にとっては、自爆ものですが、どうぞ。

『鞄　　・・・竹の心象・・・』

夏の日差しの中にほんのひととき、涼しい風も肌に感じるようになった、もう、夏も終わり。
瑞樹はほっと溜息をつくと、額の汗を腕で拭った。
郵便配達のアルバイト、しかし、涼風を遥かに上回る残暑の熱気に気が遠くなりそうになる。
瑞樹は配達用バイクを木陰に停めると、溜息ひとつ、バイクからおり、地面に座り込んだ。
力強い幹、水楢の樹木の様。中休みにと、瑞樹は幹に背を預け、ゆっくりと目を閉じてみる。瞼を通して、薄い緑色した光が流れ込んで来る。少し目を開けてみた。
葉擦れを通して青く突き抜ける空が見える。氷の空。
遠いようで近く、近いようで遠い。
ひとつ、小さな流浪雲が流れていった。速い動き・・・
空の高みでは風が激しいらしい。
瑞樹はどたっと横になると、郵便鞄を枕に目をつぶる。
陽光を浴びた風が、瑞樹の頬をそっと撫でて行く。
水晶のような木漏陽が時の流れを緩慢にした。
瑞樹は・・・・、というと、微かに寝息をたてながら。
瑞樹が目を覚ましたのは１５分の後、三時を少し過ぎた頃だった。寝ぼけ眼で辺りを見回し、ひとつ大あくびをすると、ゆっくりと立ち上がった。
ほんなら、行こか、そう、自分に呟いて。

一人の女が急な上り坂をふらつきながら歩いていた。震える両手に大きな旅行鞄が二つ。白く長い髪が俯く女の顔を隠す。白いワンピースに麦藁の帽子。
今にも女は崩れ、倒れてしまいそうになりながら、それでも、ただ、ひたすら坂を登っていた。
そして、女の横を通り過ぎて行く人、人、誰も女を助けようとするものはいない。
ある人は漫然と女を無視し、また、ある人は気持ち悪そうに女に一別をくれ、そのまま、通り過ぎて行く。
坂の上から小さな男の子が一人、転がり落ちて行くボールを追って駆け降りてくる。そして、女

と擦れ違う瞬間、その男の子の視界に白い髪に隠れる女の顔が入った、
白い髪には不似合いな若い娘だった。しかし、その焦衰しきった表情は・・・。
メドウサに出会ってしまった人間のように、男の子の躯が恐怖に硬直していた。

女はただ、ひたすら歩き続けていただけだった。

瑞樹は口笛を吹きながら、のたのたとバイクを走らせ、坂道を上っていた。急いで局に戻っても仕方なかったからだった。今日は月曜日、瑞樹は速達を専門に配達していたのだが、日曜日、郵便局が閉まってしまうため、配達せねばならない速達の数が月曜日には相当数減ってしまう。
実際、帰ってすることといっても、内勤の手伝いをするか、開き直ってソファで居眠りを決め込むしかない。
ふと、瑞樹は坂道を上って行く白い女を見つけた。よろける足元。瑞樹はアクセルを開け、白い女の横まで行くと、あっさりと声をかけた。
「おばぁちゃん、手伝うたげよ」
白い女は瑞樹の言葉が聞こえないのか、歩調も変えず歩き続けている。
「おばぁちゃん、おばぁちゃん。聞こえる」
俯く女の顔を白い横髪が隠していたが、急にくっと振り向き、白い女は瑞樹をにらみ付けた。
「あ・・・。すんません、髪の毛白いし、おばぁさんやて思た」
白い女は二十歳を少し越えたくらいの娘でしかなかった。
「うち、見えるの・・・」
白い娘は立ち止まると、鞄を地面におき、怪しいものでも見るかのように、瑞樹の顔をしげしげと見つめつけた。
「見えるて・・・、そこにいやはるんやから見えるに決まってますがな」
瑞樹は軽く笑みを浮かべると、白い女をそっと見つめ返した。
「そっか・・・、やっぱり見えてるんやったんか・・・・」
白い女は納得したように一人呟くと、再び、両手に旅行鞄を持ち歩きだした。
「ちょっと、待って。鞄、重たいんちゃうのん、バイクの後ろの篭、これに入れてきぃな」
娘は流れるように振り返り、ためらいがちな笑みを微かに浮かべると、瑞樹に始めてその笑みを見せた。
「おおきに、そやけど、ええんよ。これ、うちの罪やから」
「罪・・・、なんやようわからんけど、それ、入ったあるん、壊れやすいもんなん」
白い娘は微かにかぶりを振ると、思い切るようにして呟いた。
「丈夫すぎてね・・・」
「ほな、ええやん」
瑞樹はバイクをおりると、白い娘の横に立った。
娘は疲れの翳る顔にくっといたずらっぽく笑みを浮かべて囁いた。
「無理やよ、重いし」

「それやったら、余計やないのん。女性にそんな重いもん持たせて、知らんふりやなんてでけへんし」
気楽に鞄の取っ手をつかんでみる、これは、氷・・・、まるで氷ででもできているのか、ふるえるほどこの旅行鞄の取っ手は冷たく凍えている。取っ手を掴む、この掌だけが次元でも超えたのか夏の残り香を色濃く残すこの風景を離れ、そう、遥か上空、空の高み、青空、青い空の冷気だ、掌だけが遥か上空の青空にある。
瑞樹は消えそうになる意識に意志をそそぎ込み、その取っ手をおもいっきり握りしめた。
そして、鞄を地面から持ち上げようとする。しかし、鞄は地面に吸い付けられてしまったかのように、全く動こうとはしなかった。
両手で取っ手を掴み、思いっきり力を入れてみる。
「無理せんでええよ。生身の人にはあかんねんし。誠意だけありがたくもらっとく。それだけで十分嬉しい」
そっと呟いた娘の顔は出会ったときと違い、焦りのない穏やかな笑みを浮かべていた。
瑞樹は不意に鞄から手を離し、くっと娘を見つめるといたずらっぽく笑みを浮かべた。
「私ゃ、意地っ張りです」
そして瑞樹は鞄を底から両手で抱きかかえるようにして持つと、全身の力を込めた。震えながらゆっくりとゆっくりと鞄が浮き上がる。
鞄の重みは尋常なものではなかった。そして、この鞄を持ち上げることによって確かに全身が震えて来る重さを瑞樹は感じていたが、それ以上に心に重く重くのしかかってくる地球一個分はゆうにある鞄の存在をはっきりと感じ取っていた。
瑞樹はよろよろと歩きながらバイクの横まで行くと、ゆっくりとその荷台に鞄を置き、両手を戻し、溜息ひとつを、つく。
ふと考えて、後ろのタイヤを診てみる。あれだけ重い鞄を載せたにもかかわらず、バイクのタイヤは全く凹みもせず、正常なものだった。
瑞樹はふと娘の言った罪という言葉を思い出した。振り返ってみる、娘は瞬きもせず、瑞樹を見つめていた。口元が今にも泣きだしそうに震えている。
「どないしゃはったんです」
「ごめん・・・」
娘はそう一言呟き、唇を強く咬んだ。
「どういたしまして」
瑞樹はおかしそうに笑うと、もう一つの鞄にも手をかけた。それを止めるように娘は瑞樹の腕を・・・、触れた娘の両手は氷のように冷たかった。
「生きとる人は皆自分の事で精一杯やし・・・、うち、それ、よう、わかってる・・・。そやし、もう、ええよ・・・」
冷えきった掌。瑞樹は触れる娘の両手を見つめた。
震える娘の手、この手の振動は自分に何を伝えようとしているのだろう。
人は声で自分の思いを伝える。声は空気の振動。ならば、直接、娘の振動が自分に伝わってくる

、この今、もう少し自分の心が美しければ、疲れた心でなく、澄んでいれば、きっと、きっとこの振動の思い、解るのに。
「私も一人の男と致しましては」
瑞樹は柔らかに笑みを浮かべて言った。
「こんな重いもん女性に持たせて平気な顔できませんわ」
渾身の力を込めて瑞樹はその鞄を持ち上げた。ゆっくりとバイクの荷台に載せる。
「何処まで行くんです」
「躯、大丈夫ですか」
娘は瑞樹の問いに答えるよりも早く、我慢しきれないようにして尋ねた。
「・・・躯。別にどもないよ」
不安げな娘のまなざしを軽く避けるように首を振り、瑞樹はバイクにまたがった。
「・・・竹町、です・・・」
俯きながら娘はそっと呟く。
「竹町、うん、そんなに遠いことあらへんな。ほな、行きましょか」
瑞樹は微かにアクセルを開け、ゆっくりとバイクを走らせだした。途端、何かが乗り掛かったような重量感を瑞樹は背に感じた。
その重量感は、動けば動くほど耐えきれない重さに増して行く、邪悪なゴーレムがその巨大な手のひらで自分を地面に押し付けつぶそうとする。
つぶされる、つぶされる、汚れた一片の紙切れになってしまいそうだ。道横切る猫のように。
瑞樹には急に押し寄せた重みの理由が解らなかった。しかし、その重みは容赦なく増加している。
「いいです、うち、鞄持ちます」
娘は瑞樹の額に流れだした脂汗を見付け呻くように叫んだ。
「大丈夫やよ、気にせんと」
「そやけど・・・。うちの罪は、罪の重さは・・・」
消え入りそうな声で呟く娘の、その真剣なまなざしを見つけたとき、瑞樹はこの重みが娘の背負う罪と、それに呼応した自分の罪の重さであることに気がついた。自分が自分を支えきれずにいる。
瑞樹は苦痛を隠し、くっといたずらっぽい笑みを浮かべた。
「名前、なんていううん」
「・・・竹水玲子・・・」
「ふうん、竹町の竹水さん・・・、ほんなら一丁目十二番地でしょ」
玲子は心を隠すように、興味深そうな表情を作ると、瑞樹の顔をのぞき込んだ。
「流石、郵便屋のおっちゃん。ん・・・、そや、おっちゃんの名前は」
「おっちゃん、あれ、何処におっちゃんがおるの。おにいさんんやったらここにおるけど」
「仕方ない、おにいさん言うたげよ。おにいさん、名前は」
「二十二歳のおにいさんの名前はね」

「わぁっ、うちより一つ上なたげやのに」
「ごめんね、老けとって、おっちゃん、瑞樹ていいます」
「すねんと、すねんと」 玲子は軽く瑞樹の肩をとんとんと叩いて、小さく笑った。
「竹水さんて、今、旅行の帰りなん」
「いや、竹水さんなんて、玲子、そう呼んで」
そっと瑞樹の目を見つめた、と思った瞬間、二人とも吹き出して。
「ごめん、笑たん、他意はないんよ、瑞樹ちゃん」
笑いながら言う玲子に瑞樹は玲子の思いやりを感じた。・・・せめて、ほんの少しでも苦痛を忘れて欲しい。
「なぁ、瑞樹ちゃん、宮澤賢二に興味持ってる」
「好きですね」
「うちも。そやから賢二の故郷の花巻に行っての帰り」
「稲の穂が青々としとった。土の人が居って。そんで・・・」
玲子はふっと俯き、足元を見つめた。
「取り返しの・・・」
玲子は急にやわらかな笑みを浮かべると、運転する瑞樹の腕に手を触れた。
それに呼応するかのように瑞樹は自分を押さえつけている重みが少し弱まったことに気がついた。
「ええですよ」
「ううん、うち、嬉しいから」
微かな笑みを浮かべ、二人はそれを最後に口を閉ざし、進み続けた。
竹町はおよそ二十年ほど前までは、竹村と呼ばれ、町から一つ山を越えたところにある小さな集落だった。今でこそ、新しい家が何軒も建ち、他の町とも交流があるが、その頃は閉鎖的な村で、婚姻などもすべて、その村の中だけで行われていた。
そして竹水玲子の家はその竹町の中でもかなりの風格を呈した旧家であった。
いつしか足元がアスファルトから地道に変わる。ゆっくりとバイクを走らせながら、瑞樹は辺りを少し見渡してみた。竹町は山間にあるため、広々とした畑は作れず、どうしても細長い段々畑になる、気取らぬ速さで午後の日差しを浴びた風が田一面の青い穂の上を走っていった。
畔道には季節外れのあざやかすぎる彼岸花が群生する。夏ももう終わる。
しかし、そんな竹町をより印象づけているのは、その名の示す如く、竹林の多さだった。町の面積のほぼ、八割は竹林になるだろう。道の所々も竹林のトンネルとなってしまっており、昼間、日差しの中で見上げる竹の木漏陽の美しさには比類ないものがあるが、夕暮れ時に遊び遅れた子供の泣きじゃくりながら家明りを目指して駆け抜ける姿も思い浮かべられて仕方がない。
竹林には磨き抜かれた刃の如くの鋭さがある。
「なぁ、瑞樹ちゃん、竹、好き」
不意に玲子が呟いた。
「好きですよ。竹には厳しさがあるし」

「へー、かっこええこと言うてくれるやん」
柔らかな笑みを浮かべると、玲子はそっと見上げた、薄い緑色した竹のトンネル、透きとおる葉と葉の間から日差しが駆け抜ける。
瑞樹はバイクを止めると、エンジンを切り、押して歩きだした。背の重みは玲子の手のおかげで、すこしは軽くなっていたが、それでも苦痛をおぼえる重みであることには違いなかった。
「ごめん、しんどいやろし、バイクに乗って」
「あぁ、ええですよ。後は平らな道やし」
玲子は少し俯くと触れていた瑞樹の腕にそっと力を入れた。それにあわせて、瑞樹の背が少し軽くなる。
「気にせんといてくださいな。別に乗ってもおりても関係ない道やねんから。俺、歩くん好きなんです。歩きながらが一番、頭が冴える」
ゆっくりと玲子は顔を上げ、瑞樹を見つめた、眩気な笑みを浮かべるその目元に、微かに涙が浮かんでいる.
「うちの家には竹にまつわる話がぎょうさんあるんよ、うちの大好きな話、教えたげる」
瑞樹は静かに笑みを浮かべ、呟いた、

・・・聞かせてくださいな・・・

昔、竹は小さな草やった
それが今のように大きゅうなったんは

草やった竹が樹木に憧れたから
木のように大きゅうなりたい、長う生きたい
春が一度だけなんかどうか、知りたい・・・・
願い、焦がれ

少しずつ、少しずつ竹は大きゅうなった、少しずつ、少しずつ、竹は長う生きられるようになった、ほんま幸福やった

そやけど、長う生きられるようになって、竹は何処かに一抹の不安と寂しさを抱くようになってしもとったんや

ほんまに己は生きてきたんやろうか、いま、ふわっと現れただけやないのんか
何が己の生きて来たことをあかしてくれよう、他の誰でもない己自身に

そう、樹木には年輪がある
年輪が他の誰でもない、己自身に己が生きて来たことを示してくれる

そやけど・・・・

竹は無理に大きゅうなったため、その内を空洞としてしもた

なんぼ、大きいても空洞には年輪を描く余地はあらへん

それに気づいてからちゅうもん、竹は、鉛雨の降る日には、俯くようになってしもた

玲子は小さく溜息、ひとつ、ついた。視線を頼りなげにうつろわせる、触れる手が凍えた。

俯く、俯く・・・

・・・これは・・・

俯いた拍子に見つけたもんは落ちて朽ちかけた記憶の破片やった
通り過ぎる生き物達の、雀や人間や狸や狐・・・
・・・思い出したいことが思い出せぬのは、記憶を落としてしもうたから・・・

竹はその記憶の破片を地層の如く、拾っては節と節との間に重ね続けた
ため続けた記憶の地層で竹は己が生きた証を己自身に示すことが出来る、そう考えたんや

そして重ねられた記憶の破片が時の流れと共に化石に変わる。竹は無精繁殖で無限の時の流れを越え続ける
記憶の化石をその身に抱きながら

・・・これが竹の年輪です・・・

「瑞樹ちゃん、いっぺん、気い向いたら、竹に額を付けてみい。歌が聞こえて来おるし。化石の歌、竹の節と節の間から竹の年輪になった記憶達が歌をうたう」

・・・月の出る晩、風のない晩、静かな心で竹林を歩くと、鈴の鳴るような声が聞こえて来る。
竹の中で歌う声。幽幻の吟遊詩人のように、ひそやかに、秘めやかに。
化石となった記憶達、その思いはいかほどか・・・

「おおきに、瑞樹ちゃん」
いつしか、竹水と書いた表札の家の前。大きな門のある旧家で、中では幾羽かの鶏が小石を食んでいた。
「どういたしまして」
瑞樹は軽く答えると、荷台から鞄を降ろしにかかった。
「ええよ、うち、降ろすし」
玲子が一つを降ろし、瑞樹はもう一つの鞄を持ち上げて、鞄が少し軽くなっていた。確かにたまらない重さではあったが、最初のどうしようもない重さではない。瑞樹は鞄を降ろすと、荷台の中をのぞき込んでみた。荷台の中は確かにからっぽになっている。
「玲子ちゃん、なんや鞄、軽うなったんちゃう」
心配そうな瑞樹の言葉に玲子はそっと顔を上げ、瑞樹の目を見つめた。
「・・・瑞穂ちゃんが軽うしてくれたんよ。うちの罪・・・、少し減った。おおきに・・・」
玲子は微かに安心した笑みを瑞樹に浮かべると、左手を瑞樹の目の前に差しだした。手首を走る傷。探るように玲子の左手がうごめく。ふっとその手にあざやかな紅連の色をした彼岸花が一輪、現れた。

「うちにでけるたった一つのお礼です・・・」

玲子の囁き。

瑞樹が彼岸花を受け取ると同時に、頭を下げる玲子の姿が薄れ、鞄もろとも消えていった。

「そないゆうたら・・・、今日はお盆やったな。すっかり、忘れとった」
瑞樹は少し笑うと、彼岸花をそっとポケットに差し込んだ。そして、自分の左手首を見てみる。残る手首の傷、一筋。

・・・いつか、成仏できますよ、鞄の中の罪も消えて・・・

瑞樹は局に戻ると控え室の安っぽいソファにどたっと寝転がった。
別に控え室と言っても、たいしたものではない、大きな部屋の一角に単にカーテンを引いてそこに拾ってきたソファー一式と一段高くして何畳かの畳を引いただけの所だった。カーテンの外には沢山の区分け棚があり、内勤の者が二人、つぎつぎと郵便物を地域毎に整理している。たたたたっとリズムに乗って手紙や葉書が仕訳され、並べられて行く。

「瑞樹ちゃん、ちょっと、来てんかぁ」
内勤の榊原さんの声。瑞樹はもそもそと起き上がるとカーテンを開け、出ていった。
「はぁーい」
「ちょっと手伝うてぇな。今日、二人有休とっとって、手が足らんのや」
「ええですよ、あんまし、昼間、寝たら、夜、寝られへんようになってまうし」
瑞樹はおどけて言うと、棚の一角に立ち、仕訳しだした。
「なんや、今日は、瑞樹ちゃん。えらい気分良さよやないか、なんか、ええことでもあったんけ」
手も止めずに榊原さんが言う。瑞樹は少し面白そうに笑みを浮かべて言った。
「・・・実は・・・、やっぱり内緒にしとこ」

五時、ちょうどに瑞樹は局を後にした。この郵便配達のバイト。バイト代はさしてよくないが、それだけに、納得さえすれば自分の時間をかなり自由にとることができる。
瑞樹は局を出て、ぶらぶらと歩きながら家路へと向かった。瑞樹の歩き方は決して早いものではなかった。ゆっくりとゆっくりと歩く。風に吹かれては立ち止まり、人の歩みを見てはあくびひとつをついて。歩く。
瑞樹はゆっくりと歩きながら、思考するのが好きで、思考が深まると、何時の間にか、歩いていること、それ自体を忘れてしまう。
いつしか、辺りも少し薄暗くなっていた。夏とはいえど、この時期、秋を微かに匂わせる。
少し寄り道にと、瑞樹は家路を外れ、川の土手を歩きだした。
川面がうっすらと茜色につきかけだした遠い空を映しだす。瑞樹は河原におりると、そのまま、草の上に座り込んでしまった。

ふと、河原に生える草々が、風が流れて来たことを教えてくれた。

「お盆が終わるまで、いやはらへんのですか。せっかく、遊びに行こて思てましたのに」
瑞樹は、そう、川面を見つめたまま、語りかけるように呟いた。
すると、まるで始めからいたかのように、玲子が瑞樹の横に座ったままの姿で現われた。
「やっぱし・・・。逃げだしたんよ。情けのうて、辛うて、痛うてね。親の顔、まともに見れへんかった、後悔先にたたずちゅうけど、ほんま、自分自身を殺すやなんてこと・・・」
玲子はそういうと、微かに俯いた。唇をかみ、震えを殺す。

ここから見ると、夕陽は川の上流に向かって沈むかのように見える。人が河原で石投げをするように茜色した光が川面を走る。
「落ち込んで、どないします。しっかりせな」
瑞樹は川面を見つめたまま、鋭く呟いた。いつしか、空は紅連に燃え、流浪雲が炎になる。いつのまにか、川の上流に夕陽が沈みだしていた。

「そうやな、うち・・・、しっかり歩いて行く。いつか、鞄の中の、うちの罪が消えるまで」
そういうと、玲子はゆっくりと立ち上がった。瑞樹も立ち上がると、玲子に向き直った。
玲子はそっと瑞樹の傷有る手首を両手で包むと、俯き、自分の額を重ねる。
「瑞樹ちゃんもしっかり。うちみたいに自分を殺さんようにな」
玲子は顔を上げると、いたずらっぽく笑みを浮かべた。
「俺も、今日で少し強うなりましたし、大丈夫ですよ」
瑞樹は軽く笑みを浮かべると、玲子に頭を下げた。
「そや、来年のお盆はどないしゃはります」
「これこれ、うちに惚れたらあかんよ。瑞樹ちゃん」
「なるほど、それもそうですね。どうせ、実らぬ恋やもんね」
「あー、なんて嫌な奴。信じられへん」
玲子は面白そうに笑みを浮かべて言うと、くすぐったそうに小さく声を出して笑った。
「まぁね、そやけど多分、性格の悪さでは玲子ちゃんもかわらんと思うけど」
瑞樹はくっと玲子を見つめると、からかうような笑みを浮かべる。
玲子は何か安心したような表情を浮かべると、わかるかわからないかぐらいの微かな笑みを浮かべた。そして、瑞樹をじっと見つめる。
「瑞樹ちゃんにうちの姿が見えておるんは、瑞樹ちゃんの心がうちと同類、死んでおるからやと思う。今の人達は生きた躯に死んだ心の人が多い。そんな心の持ち主ばっかりやから、小さな子供にすら、うちの姿が見える」
「死にながら、生きておるちゅうことですか。ちょっと怖い話ですね」
「実際、怖い人は多いよ」
玲子はある種、諦めにも似た表情を浮かべたが、すぐに笑みを浮かべて、くすぐったそうに瑞樹を見つめた。
「瑞樹ちゃんの心、うちが蘇生させてあげました。感謝するように」
「なるほど、そっか。ありがとうございます、しっかりと感謝いたします」
瑞樹は笑いをこらえるようにして、そう答えたが、ふっと思い付いたようにして、いたずらっぽく玲子を見つめた。
「大変やん。ほな、もう玲子ちゃんに会われへんようになってしまうよ、寂しいよう」
「瑞樹ちゃん、かわいこぶるんは、少々、無理かあると思うのですが」
玲子は少し、すまし顔で答えたが、すぐに軽く声を出して笑うと、小首を傾げて言った。
「うちは、たとえ、うちの姿を見てもらえへんでも、声を聞いてもらえへんでも、存在すら気づいてもらえへんでも。そうやな、やっぱり、うちは瑞樹ちゃんの心がいきいきとするほうがずっと嬉しい。ほんまにそう、思える。不思議なほど」
玲子の笑みを浮かべたままの瞳から、不意につらつらと茜色に染まった涙が流れだした。
玲子は照れ隠しにきゅっと眩気に笑みを浮かべると、ゆっくりと両手に鞄を持ち上げた。
静かに玲子の髪が茜色に染まる。そして、そっと凍えきった夕風に揺れた。ゆっくりと瑞樹に頭を下げていく。

次第に玲子の姿が消えて行った。背にしていた夕陽が薄れる玲子の姿を通して、茜色の光を投げかける。瑞樹は言いかけた言葉を押さえつけると、玲子が消え去るのを静かに見届け、そっと、小さく吐息ひとつをもらした。
立ち尽くしたまま、流れる川面をじっと見つめ続ける。
・・・しっかり、しっかり・・・
瑞樹はくるっと踵を返すと、一瞬、薄墨色の空をにらみつけ、また、寒そうな笑みを浮かべて、歩きだした。

・・・瑞樹ちゃん、いっぺん、気い向いたら、竹に額を付けてみい。歌が聞こえて来おるし。化石の歌、竹の節と節との間から竹の年輪となった記憶達が歌をうたうんよ・・・

・・・なぁて、瑞樹ちゃん・・・